

令和 2 年度栃木県中学校長会 研究成果

「資質・能力の三つの柱に基づく確かな学力の育成」

～新学習指導要領の趣旨を生かした特色ある取組を通して～
芳賀地区中学校長会

「 道徳科の授業の実質化を高める研修の推進 」

～教科化に向けた改訂のポイントを捉えた授業づくりと評価の工夫・改善～
佐野地区中学校長会



佐野市 三滝



真岡市 綿の花

(とちぎフォトライブラリー ～とちぎの写真より)

この資料は、令和 2 年 9 月 10 日（火）に開催予定であった、令和 2 年度第 4 1 回栃木県中学校長会研究大会における発表担当の芳賀地区、佐野地区の研究のまとめです。

栃木県中学校長会

資質・能力の三つの柱に基づく確かな学力の育成 ～新学習指導要領の趣旨を生かした特色ある取組を通して～

芳賀地区中学校長会

真岡市立物部中学校長

市村 政幸

1 はじめに

子供たちが生きるこれからの未来は、知識基盤社会の下で情報化やグローバル化が進展する、予測困難な変化の激しい時代である。

このような社会を生き抜くためには、「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養」、「生きて働く知識・技能の習得」、「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」のいわゆる「資質・能力の三つの柱」に基づく「確かな学力の育成」が必要となる。

授業を例にとっても、学習内容を人生や社会の在り方に結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるように、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの改善が求められている。

本地区では、「確かな学力の育成」に向けた各校の特色ある取組を研修会等の機会を利用して共有し、自校化を図りながら指導の改善・充実に努めているところである。

2 地区の状況及び芳賀郡市中学校長会について

本地区は県南東部に位置し、真岡市、益子町、茂木町、市貝町、芳賀町の1市4町で広域圏を形成している。芳賀地区全体の人口は約14万人であり、生徒数は約4千人である。地区内には15校の中学校があり、規模別中学校数は以下のとおりである。

【芳賀地区の規模別中学校数】

生徒数	学校数
400名以上	2校
300～399名	4校
200～299名	4校
100～199名	3校
99名以下	2校

昨今の生徒数の減少により、平成29年度に統廃合で学校数が2校減少するなど、教育環境は縮小の一途をたどっている。

そのような状況の下、芳賀郡市小中学校長会

では、年間6回の研修会を実施するなど各校の特色ある教育活動を共有し、教育実践の工夫・改善に取り組んでいる。

3 研究の概要

「資質・能力の三つの柱に基づく確かな学力の育成」を研究主題として、新学習指導要領の趣旨を生かした各校の特色ある取組を共有し、自校化を図りながら指導の改善・充実に努めている。主な実践内容は以下のとおりである。

(1) 「知識・技能の習得」からのアプローチ

ア 家庭学習強調週間の実施

(市貝町立市貝中学校)

家庭学習の習慣化に向けて、町内の小中学校が連携し、年3回、同一の期間を家庭学習強調週間と定め、指導の充実に努めている。また、期間中は、学習に関する親子での話し合いや学習しやすい環境づくり等をお願いするなど、家庭の協力を得ながら実効性を高めるよう工夫している。

特に、以下のように、期間中の各家庭での取組をまとめたものを改めて保護者に示すなど、双方向性を持たせており、家庭での学習に対する保護者の啓発や生徒自身の取組改善の手掛かりとなっている。

第1回家庭学習強調週間(9月)を通して

いつもの環境でリビングで勉強していましたが、家族と話し合ってから、勉強していました。
3年男子

中間テストがあったので、勉強しました。近頃、テストもあって、勉強のペースが狂っていました。でも、勉強のペースを戻すことができました。
1年女子

なるべくTVをつけずに、勉強している周りでスマホを使わないようにしました。
2年女子

ゲームや携帯の時間を決めて、メリハリのある学習をすることにしました。家族でルールを決め、ルールを守って欲しいという話し合いをしました。
3年男子

学習の取り組み方について話し合いました。授業で分からないところは、積極的に先生に質問しました。授業で分からないところは、積極的に先生に質問しました。
2年女子

テストが近かったため、積極的に勉強に取り組む姿が見られました。小学生の弟と一緒にテレビを消して2人で勉強していました。自分が勉強している内容についてよく話してくれ、やるようになりました。
3年男子

第2回家庭学習強調週間に取り組む前に・・・

毎年、実施している家庭学習強調週間の取組に、ご協力をいただきまして大変ありがとうございます。今年もたくさんのご家庭から、実践報告をいただきました。これからもより取組を充実させていければと思っています。

イ 学習習慣の徹底週間の実施

(真岡市立長沼中学校)

各学期の始まりの最初の2週間を学習習慣を身に付けさせる期間と位置付け、定められた項目について重点的に指導する。また、生徒による自己評価と担当教員による評価を集計し、今後の指導に役立てている。

学習習慣の徹底週間 集計表

		6/15	6/16	6/17	6/18	6/19
① チャイム前番帳ができたか	1年	30	30	25	28	30
	2年	30	30	25	30	30
	3年	26	30	25	30	30
② 先生や友達の話に真剣に聞いたか	1年	29	30	25	30	30
	2年	30	29	24	30	29
	3年	29	30	25	29	30
③ 指名されたら振る声で返事ができたか	1年	29	28	25	29	27
	2年	30	27	25	30	29
	3年	27	23	22	29	30
④ 最後まではっきり発表ができたか (相手役の表情がない場合→積極的に授業に取り組み続けたか)	1年	28	26	24	30	27
	2年	29	28	24	29	27
	3年	27	27	21	27	30
⑤ 学習用具・書類の忘れ物はなかったか	1年	28	29	25	30	27
	2年	28	29	24	30	28
	3年	30	27	24	29	28

ウ 生徒の意欲を高め定着を図る「Small Talk」の工夫

(真岡市立中村中学校)

外国語活動の教科化により、中学校の学習内容の一部が小学校で履修されることになり、これまで以上に互いの学習内容を理解し継続、深化させることが求められている。「おしゃべり」を意味する「Small Talk」は、生徒が関心のある話題について、これまで身に付けた英語で会話を繰り返す活動である。中村小・中村中は小中連携の下で英語教育を推進しており、「Small Talk」に継続して取り組むことで、知識・技能を活用したコミュニケーション能力の育成や繰り返しによる語句や表現の定着が図られている。

◆トピック：動物の好みについて

小学校 A: What animals do you like? B: I like pandas.

A: Oh, really. Me, too.

◇相手の答えに反応、共感する。ジャスチャー、相づち等も入れ会話を楽しむ。

中学1年 A: What animal do you like?

B: I like dogs. They are cute.

◇小学校の活動に加えて、理由を入れる。

中学2年 B: I like dogs because they are cute. I have a dog.

When I come back home, he always welcome me.

◇中学1年生の内容にさらに接続詞を使い、理由の根拠や経験等も加える。

中学3年 ディスカッション

Which animal do you like better, dogs or cats?

◇相手の意見を理解し、自分の意見を相手に伝え理解してもらう。

◎ねらい：同じようなトピックでも学年と共に内容を深化させることにより、小学校の学習やこれまでの学習で獲得した知識・技能を活用して「主体的・対話的で深い学び」の実践につなげることができる。

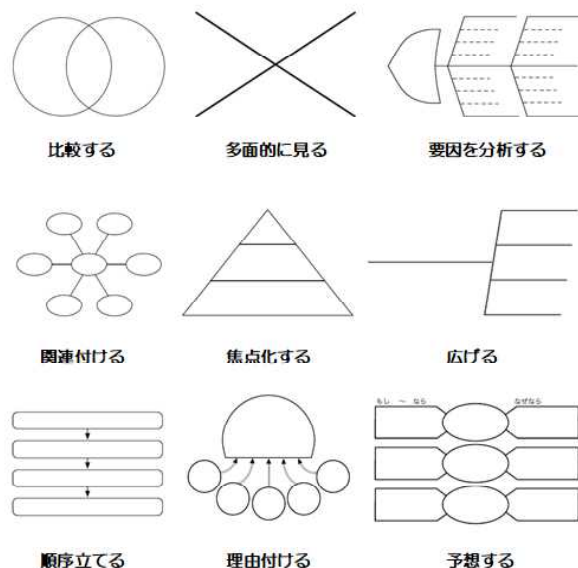
(2)「思考力・判断力・表現力等の育成」からのアプローチ

ア 物部中版思考ツールの活用

(真岡市立物部中学校)

新学習指導要領の全面実施を間近に控え、「深い学び」につながる思考力の育成が重要と考え、「物部中版思考ツール」を作成した。考えを広めたり深めたりするためには、情報を整理・分析したり、知識と知識を結び付けたりすることが大切である。思考ツールはそのひな型を示すものであり、生徒は授業中の様々な課題に対して必要な思考ツールを選択して解決を図っている。その繰り返しにより、様々な情報や知識の中から必要なものを適切に関連付けて結論を得ることができるようになり、思考力が育成されると考える。

【物部中版思考ツール】



イ 全ての教育活動における「書く」活動の実践

(真岡市立真岡東中学校)

前年度の学校評価を基に、新年度初日に教職員ワークショップを実施し、今年度の学校課題とすべき生徒の資質・能力を洗い出した。圧倒的に「表現力（書く力）」が課題として上げられたため、学校課題に設定するとともに、全ての教育活動において「書く」活動を取り入れた。本校独自の連絡帳「足あと」の日記欄には、全生徒がスペースいっぱい日記を書くことを徹底指導している。徐々に「書くこと」に対する抵抗感が取り除かれ、日常化しつつある。また、

全教科において意図的に「書く」活動を取り入れるよう、学習指導主任が中心となって働きかけている。教職員は「スモールステップ」「粘り強い指導」を合言葉に継続した指導を行い、文章による表現力の向上が図られている。

生活の記録（反省・日記・相談など）
今日の道徳の授業では、いじめについて の話をしました。私は、人がいじめられている のを見た事がないけれど、いじめは、悪い事だと 知っています。来4年次のクラスでもいじめが おきないように、クラスみんなが「チーム」 気をつけられるようにしたいです。
全ての生徒が欄いっぱいを書くよう指導を徹底している

（３）「学びに向かう力・人間性等の涵養」からのアプローチ

ア 主体的な学習に向けた取組

◆物部中生「授業あたりまえ１０か条」の実践 （真岡市立物部中学校）

授業に臨む際の注意事項を、毎年、生徒会が中心となって生徒自身で考え、「授業あたりまえ１０か条」として定めたものである。模造紙に書いて教室に掲示するとともに、Ｂ５サイズでパウチ加工し全生徒が下敷きとして利用できるようにしている。自分たちで決めたことを常に意識することで、主体的に授業に臨む態度が養われている。

物部中生 授業あたりまえ１０か条
1. 学習空間を整えよう。
2. 授業の準備を休み時間にしよう。
3. タイムが鳴る前に着席しよう。
4. 授業開始、終了のあいづつをしっかりとしよう。
5. めあてを理解しよう。
6. 先生の話をよく聞き、真剣な態度で授業を受けよう。
7. ノートをきれいに取ろう。よい発言や意見はメモしよう。
8. わからない所は積極的に質問しよう。
9. 積極的に発表しよう。
10. 友達との発表をよく聞こう。
※発言時の声の大きさは場合によって異なる

（４）その他の視点からのアプローチ

ア ICTを活用した授業づくり

（真岡市立真岡西中学校）

真岡市教育委員会が積極的に導入を進めているICT機器を効果的に活用しながら、授業の改善に取り組んでいる。ICTの強みである、

「情報を魅せることで、児童生徒の興味・関心を高めること」や「時間的・空間的な差異を克服し、疑似体験や遠隔地との交流ができること」、「個別に最適化された学習環境の下、個々の進度で学習し学びを深めることができること」などを生かして授業づくりを進めている。

次に示すのは、第２学年の理科の授業において、タブレットで各班が描いた雨の降る範囲を見せ、その違いに気付かせることで、グループでの検討の視点を与えている場面である。



イ 学力向上アクションプランの活用

（真岡市立物部中学校）

学力向上を学校経営の柱の一つに位置付け、学校独自の「物部中学力向上アクションプラン」を作成し、指導の改善・充実を図っている。「学力向上アクションプラン」とは、生徒の学習状況を踏まえ教務主任や学習指導主任が中心となって作成した、学力向上に向けた全体計画である。様々な形で行っている学力向上に向けた取組を俯瞰することで、職員の共通理解が深まり、系統立てて学力向上に取り組むことができる。

令和２年度 学力向上アクションプラン 真岡市立物部中学校	
学校経営理念（使命・ビジョン） 「地域貢献」「国際貢献」を合い言葉に、二宮尊徳先生の教えが今なお息づくふるさと物部を愛し、夢を持って、広く国際社会で活躍できる生徒を育成すること	
学び合う学校を目指して 「学び合い」→生涯にわたって学び続ける態度・確かな学力の保証 ○学習したことと自分の将来との関係に意識を向け、自主・意欲を高める。 ○基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付けさせるとともに、それらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育成する。 ○主体的・対話的で深い学びによる授業改善によって、今後必要とされる資質・能力を育成する。 ○学習の成果を自己の成長と社会への参画に生かす生徒を育成する。	
学力向上のための基本方針 「確かな学力」を育む授業指導と「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善の推進 授業指導における「学びに向かう集団づくり」と「子どもが主体的に取り組む授業づくり」を基盤に、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図り、これらを活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力等を育成するとともに、主体的に学習に取り組む態度を養う。その際「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、ICT機器を活用した授業改善を推進する。	
プロジェクトMONOBE プロジェクト「知」——プロジェクト「徳」——プロジェクト「体」——プロジェクト「生き方」	
目標 確かな学力を身に付けた生徒の育成	
努力点 基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着 ○教科担任による「復習確認小テスト」と学級担任による「基礎学力向上テスト」等を活用した実効性の高い取組 ○新年度授業開始前10か条の徹底 ○「学力向上のための自分振り返りアンケート」の活用 ○家庭学習の習慣化と定例学習会、学級だよりにおける学習コーナーの設置 ○家庭学習の課題の与え方について教職員で共通理解 ・家庭学習の目的や方法の指導 ・家庭学習に対する保護者の意識の啓発 ○「振り返りシート」を活用した振り返りの会での振り返り活動の充実	努力点 学習指導の充実 ○「新年度授業づくり当たりまえ10か条」の確実な実践 ・「教師用チェックシート」の記入と振り返り ・「学力向上のための生徒による授業振り返りアンケート」に基づく課題の把握と改善 ○「分かる・できる・定着する」指導の徹底 ○実力テストの分析による課題の特定と補完的な学習の充実 ○「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業改善 ○「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業スタイルの確立 ・生徒同士の話し合い活動の場の設定 ・相手の話を聞き取り、設問を読み取りする力の育成 ・発言を聞き取り合うことによる論理的な思考力の育成
努力点 ICT教育の推進 ・ICT機器を活用することによる論理的な思考力の育成	

4 成果と課題

(1) 成果

ア 「知識・技能の習得」に関しては、基礎的・基本的な知識・技能を着実に獲得しながら、既存の知識・技能と関連付けたり組み合わせたりしていくことにより、知識・技能の定着を図ることが重要である。そのため、普段の授業はもとより、家庭学習の果たす役割が非常に大きい。

双方向性をもたせた「家庭学習強調週間」等の取組は、保護者・生徒の意識の変容を促し、家庭学習の内容の充実が図れるなど、「知識・技能の習得」につながった。また、小中一貫で行っている「Small Talk」の取組では、英語を使用したコミュニケーションの場が継続的に用意されていることによる意欲の高まりや、語句や表現のリユース、リサイクルが繰り返されることによる語句や表現の定着が確認された。

イ 「思考力・判断力・表現力等の育成」に関しては、問題を発見し解決の方向性を考え、解決方法を具体化して問題を解決するために必要なものである。また、情報を他者と共有しながら、対話や議論を通じて互いの多様な考え方の共通点や相違点を理解し、協力しながら問題を解決していくことにもつながるものである。

「思考ツールの活用」に関しては、十分とはいえない生徒の思考を補い、新たな思考の方法を獲得し、問題を解決する上で有効であった。また、「書く活動の実践」については、継続性のある日記指導と各教科等における「書く活動」の意図的・計画的な実施により、表現力が高まった。

ウ 「学びに向かう力・人間性等の涵養」に関しては、「知識・技能の習得」及び「思考力・判断力・表現力等の育成」の2つの資質・能力を、どのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素である。また、主体的に学習に取り組む態度や自己の感情や行動を統制する能力、多様性を尊重する態度と互いのよさを生かして協働する力やリーダーシップなどにも関連している。

「授業あたりまえ10ヵ条」に関しては、学習の約束事を生徒自身が考え実行することで、主体的に学びに向かう力が育成された。

エ 「その他の視点からのアプローチ」である「ICTを活用した授業づくり」に関しては、既に教室ごとの電子黒板や教師用タブレット等が配備されていることもあり、映像資料などによる興味・関心の喚起や意見の効果的な交流による理解の深化、個別化・最適化された学びによる学習内容の定着など、多くの成果が見られた。また、「学力向上アクションプランの活用」については、今年度からの実践であり十分な成果は確認できていないが、学力向上のための全体像を基に、重点化や新たな取組の検討などを進めることができています。

(2) 課題

ア 「知識・技能の習得」については、既存の知識と関連付けて概念化を図ったり、獲得した技能を自分の経験や他の技能と関連付けて習熟・熟達したりできるよう、教科横断的な視点からのカリキュラム・マネジメントの一層の充実が望まれる。

イ 「思考力・判断力・表現力等の育成」については、将来の予測が困難な社会の中で出会うであろう未知の状況にも対応できる力が求められていることから、問題発見・解決能力や対話の中から解決策を見いだしていく力を、授業のどの場面で付けるのかを明らかにしていく必要がある。

5 おわりに

中学校においては、いよいよ来年度から新学習指導要領が全面実施となる。現在、各校ではそのための準備を進めているところであるが、今回の研究を通して、「確かな学力の育成」に向けた各校の特色ある取組を共有することができ、大いに参考になった。今後、自校化を図りながら、指導の改善・充実に努めると同時に、校長会での情報交換を緊密に行うなど研究を継続し、新学習指導要領の理念に基づき、「確かな学力の育成」を図っていきたい。

「道徳科の授業の実質化を高める研修の推進」

～教科化に向けた改訂のポイントを捉えた授業づくりと評価の工夫・改善～

佐野地区中学校長会 佐野市立城東中学校長 島田 悦男

I はじめに

1 佐野市中学校長会について

佐野市は、旧佐野市・田沼町・葛生町が合併し、16年目を迎えている。唐沢山や関東平野、北に足尾山系に続く山並みがあり、そこに、佐野市立の8中学校と今年度開校した1義務教育学校があり、連携・協力をして情報交換と研修を深めている。今回「道徳科の授業の実質化を高める研修の推進」を研究テーマにして、授業づくりや評価の研修に焦点をあてた研究に取り組むことにした。

2 教科化に伴う今日的課題について

- (1) 道徳の教科化の背景を考えると、必ず週1時間道徳科の特質を生かした授業を行うことが前提にある。また、教師自身が自分の思いをもっているかが大切になる。教師は教科書を活用する中で、その考えや発問が本当にこれでよいのかという疑問をもち続けたところである。
- (2) 授業を構想するとき「考える道徳・議論する道徳」を意識したい。「考える」や「議論する」は「主体的・対話的で深い学び」と大いに関連がある。道徳科の主体的学びは、子どもが「自分のこととして」捉えることであり、教師には、そのための展開構想と細かい準備がなくてはならない。
- (3) 教科化によって大きく変わったのが評価である。生徒のよいところを授業の学びの中で見つけ、評価の文章にしていけることが大切になる。

3 研究の概要

今日的課題に加えて、教科化の背景には、いじめの認知件数が増加している状況で、生徒の心を育て、いじめを減らし子どもを救うことが喫緊の課題と挙げられた。

そこで、研究テーマのもと、各学校が連携・情報交換をして、各学校の教員の指導力向上を目指して研究を進めた。研究は移行期間1年目の平成31年度から始めた。

II 実践の概要

1 学校経営方針の説明の中で

総則には「全体計画を作成し、校長の方針の下に、道徳教育推進教師を中心に全教師が協力して道徳教育を展開すること」とある。

昨年度は年度当初に、学校経営方針の説明の中で、道徳の各課題により「教科化」1年目になることを明確にして、「議論する道徳」などのキーワードを基に、全職員で研修を進めていくことを示した。また、通知表に示す評価については、今後学習指導主任等とともに研究するが、まず、実質的な授業を実施していくことが重要であることを明示した。なお、「別葉」は市中教研道徳教育部会で研究し1年をかけて作成していくことになった。

2 授業研究推進の状況について(主に昨年度)

(1) A校の研究

ア 教科化の研修から

- ・年度初めの職員会議において、教科主任が教科化された道徳について説明
- ・夏季休業中に市教育委員会から指導主事を講師に招いて、研修会を実施した。

① 教科化の概要と特に推進しなければならないポイントについて

② 教科としての道徳の授業展開や発問の改善について

③ 1学期末(佐野市は2学期制)の通知表での評価の記載について

また、授業の様子をビデオカメラで撮影して、指導主事を交えての授業研究会を行い、教職員の資質向上を図った。

イ 授業研究の中から

- ・年間3回の授業研究会を実施した。各回道徳の授業を実施して、3回とも市教育委員会から指導主事を招いて、研究協議の中で指導を受けた。その中で「問題解決的な教材」の授業展開や「道徳的行為に関する体験的な活動を取り入れた教材」の授業展開、「自我の関与」に係る教材等を授業

で扱い、全体で授業研究会を行った。



上：授業研究会：付箋メモを展開案に貼っていく：A校

- ・研究授業前日には、授業者と授業終末の板書を検討し、展開案をもとに校長・教頭、授業者で授業の流れを再確認した。



上：前日の板書検討から再考し授業を展開する：A校
ウ 評価から

- ・通知表の記述による評価
 - ① 1学期は、授業観察や生徒が記述したもの等を基に、学びが顕著な部分を選び、文章で記載した。各時間の見取りと、その蓄積が大切である。
 - 例 「（教材名）」の授業では、登場人物の立場から〇〇〇について考え、◇◇◇という考えをまとめていました。
 - ② 2学期は、授業中の学習活動の様子を記載し、その後に、学びが顕著な時間の記述をした。年間を通せば生徒の学習の様子を総合的に把握できる。
 - 例 授業では、級友の意見を良く聞き、自分の考えを述べていました。「（内容項目名）」では、〇〇〇という級友の意見から、相違点を加えて◇◇◇という意見を発表しました。

エ 保護者への啓発

- ・「校長室だより」で、道徳が教科化された背景や意義を周知した。
- ・通知表のファイルに道徳の教科書を挟んで保護者に届けた。保護者と生徒で同じ教材を見てもらうとともに、記載の読み物をはじめ他に収録されている教材を読んでもらいためである。保護者にも授業中と同じような家庭での語りかけを期待した。

(2) B校の研究

ア 道徳教育推進教師が授業を公開し、全教員で授業研究会へ



上：研修会：推進教師による授業公開：B校

道徳主任（道徳教育推進教師）が、年度初めに説明したことを基にして、5月上旬に授業公開をした。全教員で参観した後に、これまでとの相違点を話し合い、理解と実践力を深めた。

イ 市教育委員会の計画訪問での研究授業



上：授業研究会：発問や展開を考えていく：B校

教職員で教科化のポイントを共有した後、学年で教材を検討して指導案を作り、研究授業と授業研究会を実施した。

(3) C校の研究

ア 授業参観による保護者啓発
学校研究課題に「道徳の教科化に伴う授

業の充実及び評価の研究」を掲げ、研究授業を積み重ねた。特に12月の授業参観は、保護者の理解推進を考え、校内人権週間にあわせ通常学級14、特別支援学級2の全学級が人権に関する「道徳科」の授業で実施した。保護者からは、「家庭で授業や人権に関することが話題になり人権の理解が深まった」、「子どもには、これからも人権を学び、友人を大切にしてもらいたい」などの意見があり、理解の深まりが見られた。また、学校評価の中の豊かな心の育成に関するポイントが上がった。

イ 校内掲示などの整備

道徳教育の掲示コーナーを設けて、行事や生徒会と各委員会の活動から、道徳的な実践につながることを掲示物にして年間を系統的にまとめた。

ウ 学年だよりでの啓発

毎月発行の学年だよりに、各月の教材を1つ取り上げて、授業の様子を保護者に伝えた。

エ 生徒自身による振り返り

学期末には授業の取組について振り返る活動を実施した。内容は二部構成で、「自分の考えを伝えることができたか」「友達の考えを自分の考えに照らし合わせながら聞くことができたか」などの項目について4段階で答えるものと、特に心に残った教材について感想を書くものである。

(4) D校の研究 (人権教育研究校として) 抜粋

ア 学年会で教科書を読み合い教材を研究

イ 全校道徳の実施

全校生徒を対象に、校長が授業を行う(Zoomを活用)。ハンセン病患者の人権について、コロナ禍の自分自身と重ね合わせて考えさせた。

3 道徳科と特別活動との連携

道徳教育の推進では、他教科・領域とのつながりは大切である。関連をまとめた「別業」が、昨年度末には各学校で完成し、活用された。

豊かな心の育成では、本市各学校が特色ある取組をしていて、地域を歩いて学ぶ活動を5校が行っている。また、1校は地域で伝承する「牧

歌舞伎」を発表したり、別の1校で開校当時から続いている集団演技を発表したりと、集団から学ぶことを継続している。また9校全てで合唱を中心にした文化的行事を実施している。どの取組も道徳教育と連動して豊かな心の育成につながっている。



上：教材研究：学年で教科書を読み合う：D校

Ⅲ おわりに

1 成果

- (1) 年度当初の、職員会議での説明や夏季休業中の講師を招いた研修の成果から、教職員の教科としての道徳について理解が深まった。今後も研修を深めていく必要がある。
- (2) 道徳科の実質化ということから、まず、校長として道徳の授業が実施していることを見取っていかなければならない。また、生徒・保護者の学校評価アンケートからチェックしていく必要がある。授業は、実質的な時間を確保し実施した。通知表の評価のためには、当然のことではあるが授業の積み重ねが必要である。

2 2年目(今年度)の研究と今後の課題

- (1) 2年目は、研修内容の共有を図り、自校に取り入れ充実するよう進めている。
課題としては、教科化になり教員の意識化が図られたものの、「議論する道徳」という点では、授業中の話し合いや展開について、今後も研究を深めていく必要がある。
- (2) 授業研究では、研究授業と研究会を意図的に設けて研修を進めている。

道徳教育は学校教育全体で推進していかなければならないので、校長のリーダーシップが重要である。今後も市中学校長会で情報交換等を継続していきたい。